

<著書紹介> 仁平政人『川端康成の方法-二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成-』

著者	伊澤 亮太
雑誌名	日本文芸論稿
号	36
ページ	26-29
URL	http://hdl.handle.net/10097/56412

著書紹介

仁平政人『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成』

伊澤亮太

タイトルに「方法」と掲げた研究書は多くあるが、本書はど作家の「方法」を明快かつ一貫して論じたものは稀であろう。本書の問題意識は次の二点にまとめられる。すなわち、言語に対する尖鋭的な認識を持ち、小説の方法として絶えず自覚的に試みていった川端康成のテクストの検討であり、そのような川端のモダニスト的な立場と、「日本」「伝統」を志向する言説との関わりである。

全体は三部で構成されており、川端の文学活動を初発期、昭和初年代、戦後の三つの期間に分け、それぞれの時期のテクストが分析されている。この構成によって、川端がその全作家生活を通してモダニズム文学の方法を追求していったこと、そして「日本」言説はモダニズム的試みを背景にして、その延長上に位置づけられることが明らかにされる。

川端の小説を何篇か読めば、そこに「日本的」「伝統美」といった一般に流通している作家像とは異質の要素を見出すことはそれほど難しくもない。もちろん、従来の研究においても川端のモダニズムについての指摘はあったが、「日本回帰」に至る以前の「非本質的」なものとして、その内実は十分に論じられて来なかった。本書は川端のモダニズムを一貫したものとして、テクストの「読み」を通じて具体的に論じた点において、先行研究とは一線を画している。つまり本書は、川端文学を神秘的

な領域に閉じ込めてきた〈川端神話〉に対し、川端のモダニズム的「方法」を問題化することでテクストを徹底的に分析の対象として扱っているのである。

それでは以下、本書の構成に沿って内容を概観してみたい。第一部第一章では、川端がベネデッド・クローチェの批評を受容しつつそれを大胆に読み換え、独自の文芸観を形成していったことが論じられる。人間の思考・感情が言語によって束縛されているという認識を得た川端は、慣習的な言葉の秩序から人間の生を解放することに文芸の役割を見出した。川端の東洋主義とは、むしろ同時代の「表現主義」との交通から生み出された「新しい表現」を志向する立場であったという。クローチェの受容を単純な影響や反映としてではなく川端による読み換えというかたちで分析し、「主客一如主義」という川端の「思想」に回収されがちなタームを小説の方法に関わるものとして再定義する手際は、鮮やかである。以後、この章で提示された川端の言語観は最終章までかたちを変えつつ繰り返し参照されることになる。

川端の評価のきっかけとなった「招魂祭一景」を論じた第二章では、視覚的なテクストという従来の見方が改めて検討し直される。「現実」という次元を離れて言葉の表層的な連鎖を為していくテクストのあり方が取り出され、「現実の再現」というリアリズム的枠組みから離れていくテクストの特性と、「写生」から「新しい表現」へと転回する川端の立場が重ねられる。続く第三章「青い海黒い海」論では、流動的に移りゆく意識を写し取るとする同時代のアヴァンギャルド芸術との共通点が見出されながらも、テクストの語りが過去の想起という枠組みから逸脱し、言葉それ自体の運動が浮かび上がるあり方が示される。

このように、流動的に生成・変化する意識や自己の制御を離れていく言葉を提示するテキストの様式が、川端の言語観と重なることが次々に論証されていく。「春景色」を論じた第四章では、現実の表象としての言葉と自然主義リアリズムの言語とは別の、言葉そのものが表層に止まりつつ水平的に横滑りしていく運動が見出される。プレテキストと比較しつつ、画家である登場人物によって「写真」という営みが問題化され、再現と表象の理念の限界性が示されたテキストであると結論づけられる。

第二部で扱われる昭和初年代は、同時代との密接な関わりを通して川端のモダニストの試みが展開された時期であるという。しかし、著者は同時代の広い文脈を見据えながらも、あくまでテキストの詳細な分析にとどまる立場を貫いている。

日本的なものといわれる川端の「連想」に関する言説と「新心理主義」との関わりが論じられる第一章では、同時代に流行したフロイト心理学を参照して川端の言語観の固有性を浮かび上がらせる。そして「日本回帰」言説の背後には、深層へと帰着することの無いテキストのモダニズムの方法があると指摘する。第二章では「抒情歌」を言葉の意味の横滑りの変容によって語りが失効に至る過程を描いたテキストであるとして、初発期からの一貫した言語観があらわされていると論じる。一方第三章「散りぬるを」論では、「合作」としての小説」ということが問題にされる。現実には起きた事件の調査を引用したこのテキストは、「私」の一義的な意図に統合されない様々な言説が絡み合うディスクールであるという。

ここで示された、他者の言葉との交通を通して形作られる「現実」というテーマは、戦後の川端テキストを論じた第三部の《記憶》の問題に接続している。第一章「反橋」連作論では、テキストの《空所》の内幕

や古典・美術の引用の意味を問うことなく、統一された意図や目的に収斂していかない《手紙》というテキストの様式に注目して論じていく。そしてテキストの流動的な言葉の連鎖によって「私」の起源が復数化されるというあり方を、モダニズム的な理念・方法の延長上にあると結論づける。第二章「山の音」論においても、因果関係に基づくことのない水平的なディスクールが取り出され、意識の動きそのものを描くというテキストの性格が見出される。テキスト冒頭における「山の音」の象徴的意味を問うて来た先行研究を批判し、信吾の流動的に動く思考自体を表現するものと捉えた点は画期的であろう。

言葉の問題を追求してきた本書において、第三章で論じられる「無言」は、格好のテキストだ。多様な解釈を呼び込みつつ意味を確定させることのない《無言》の価値が語られるこのテキストは、言葉に対する極めて尖鋭的な性格を持っているという。また、川端を「日本」文脈に一義的に回収する従来の評価とは対極的なあり方として、言葉をめぐる言説を増殖・散布するテキストのあり方が提示されている。そして、「記憶／忘却」というモチーフを正面から扱った第四章「弓浦市」論では、記憶が他者の言葉によって形成されるという事態が問題化され、川端自身が「記憶の文学」と規定する二〇世紀文学との関連に接続させられている。

以上、各章ごとの概要を簡単に見て来たが、論の一貫性、先行研究への幅広い目配り、明確で説得的な論の展開、より広い文脈への接続の仕方など、学ぶべき点は非常に多かった。大仰なレトリックに頼ることなく、個々のテキストの丁寧な分析を積み上げた上で、明晰であることを追求して本書をまとめ上げたことは着実に伝わってくる。

しかし一方で、その一貫性や明快さゆえの物足りなさも残った。特に

本書を通読すると論理展開や最終的な着地点が多く、章で共通しているために、理解しやすい一面、やや広がり欠ける印象を受けた。また、現代思想を背景にいた一連の論文は紛れもなく刺激的で示唆的なのだが、これはテキストのおもしろさなのだろうかという素朴な疑問が湧いたことも正直な感想である。

たとえば、テキストの〈空所〉を埋めたり多様なモチーフの意味や関係性を探ったりするのではなく、表現機構や様式を論じるという一段階上のレベルの問題設定は十分に納得できる。しかしテキストの個別的・具体的な様相を捉えるには、さらに細かい分析を論文に組み込むべきだったのではないだろうか。一義的な深層に固定化されない、流動的・水平的な言葉の運動という問題は本書の中で繰り返し強調されるものの、その簡潔な論述は結果的に言葉の動的な様相を抽象しているように見える。この点は注などで補われている箇所もあるが、そのような記述によって、まさに結論に回収されないイメージの豊かさや動的なテキストの様相がすくい取れたのではないだろうか。

もちろん、私の感じた物足りなさや疑問は博士論文をまとめたという本書の性格の問題もあり、あえて一つの枠組みを守りテキスト分析に踏みとどまった著者の意図ははっきりと読み取れる。また、本書はあくまで著者の川端研究の序章として位置づけられており、今後の研究の展開を見据えた上での論の組み立てであることも随所で示されている。特に「おわりに」では今後の課題がまとめられており非常に興味深い。最後に私自身が本書から得ることのできた問題意識をつけ加えておきたい。たとえば、モダニズムが古典と結び付くというこの問題は、非常に広さと深さを持っており、この点については世界的な文学の動向をさらに積極的に視野に入れていくことも可能だろう。本書でもしばしば言及

されるジェイムズ・ジョイスや、T・Sエリオットといった西洋のモダニズム作家たちは、十九世紀のリアリズムに反発し、「意識の流れ」を方法化する一方、古典や神話を取り入れることで新しい文学を作り上げようとした。モダニズム（＝新しさ）とは、一面では過去の文学を積極的に摂取することでもあったのである。

一方、日本でも古典を取り入れたと言われる近代作家は数多く存在するが、やはり西洋に対する日本（東洋）という二項対立が持ち出され、西洋からの（日本回帰）として一義的に片づけられることが多い。これらの作家についても、「思想」や「質質」としてではなく、小説の方法意識という問題設定をすることによって、具体的な分析が可能になるかもしれない。「伝統」や「日本」が「近代」「西洋」を超えるものとして見出されるということ自体の問題も含め、それぞれの作家で個別に考えられることは多い。

また、言葉に対して意識的であったのはモダニズム作家だけではない。そもそも作家とは言葉を操る芸術家であり、常にみずからの創作に意識的だからこそ、方法の分析も可能なのだ。私が本書の論述の背後に感じたのは、そのような作家に対する確かな信頼である。作家の言語観、小説観をテキストの「読み」から浮かび上がらせる本書の試みは、これから川端以外の作家においても積極的にやっていくことができるのではないだろうか。

「日本的」「伝統美」という固定されたイメージから抜け出し切れなかった川端研究を具体的な論証によって解放し、常に意識的に言葉に接し、「言葉の戦い」を続けた小説家という新しい川端康成像を浮かび上がらせた功績は大きい。本書の意義はまずその点に認められるべきであり、これから本書にならない、さらに別の作家の「方法」を論じる道が示され

た。専門とする時代や作家の別を超えて、それぞれの読者が受け止めるべき問題を含んだ一冊である。

（東北大学出版会 二〇一一年九月 一六二頁 三〇〇〇円＋税）

——いざわ・りょうた／博士課程前期一年——

前号（第35号）目次

昭和前期農村における活字メディアの展開と受容

——産業組合の出版活動を中心に——

河内 聡子

夏目漱石『文学論』と〈同感（sympathy）〉の原理（下）

——「趣味」の概念と「還元的感化」を中心に—— 木戸浦豊和

『白露』論

——「露のあはれ」歌の解釈をめぐる——

高橋 早苗

文芸談話会宛に多くの研究雑誌を御寄贈いただきました。貴重な資料として活用させていただきます。なお、書面にて御礼状差し上げるべきところ失礼させていただいております。ここに厚く御礼申し上げます。